

【オンライン開催】

神奈川歯科大学学会
第 175 回 例会
プログラム

令和 6 年 12 月 5 日(木)16 時 30 分より

Zoom ID: 826 2425 1167 パスコード: gakkai175
--

発表会場は設けません。各自 PC よりご参加下さい。

16 : 30

座 長： 高 橋 聡 子

1. Decreased Tongue-Lip Motor Function in Japanese Population with Low Taste Sensitivity:
A Cross-Sectional Study

○矢田朋美¹, 青山典生^{1, 2}, 藤井利哉¹, 喜田さゆり¹, 谷口健太郎¹, 岩根泰蔵³,
玉置勝司⁴, 三辺正人^{5, 6}, 小牧基浩¹

(¹ 歯周病学 ² 教育企画部 ³ 神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科イノベーション政策センター ⁴ 顎咬合機能回復 ⁵ 文教通り歯科クリニック ⁶ 環境病理)

16 : 45

座 長： 吉 野 文 彦

2. ヒト唾液腺癌由来細胞 A253 株におけるトキシシン結合型セツキシマブによる細胞傷害効果の検討

○黒田実可子¹, 小松紀子¹, 高才東¹, 浜窪隆雄², 安部貴大¹

(¹ 口腔外科学, ² 株式会社 PhotoQ3)

17 : 00

座 長： 木 本 茂 成

3. 頸椎形態に基づく最終下顎骨長の新しい予測法

○山口茉奈美¹, キムヨンイル², 朴熙泰¹, 山口徹太郎¹

(¹ 歯科矯正, ² 釜山国立大学歯学部 歯科矯正学講座)

17 : 15

座 長： 西久保 周 一

4. 歯科用コーンビーム CT 画像による顎偏位と上顎洞サイズとの相関

○竹田磨言子¹, 鯨井桂子¹, 高橋正皓¹, 小泉創¹, 畠中玲奈¹, 疋田悠¹, 山口徹太郎¹

(¹ 歯科矯正)

1. Decreased Tongue-Lip Motor Function in Japanese Population with Low Taste Sensitivity: A Cross-Sectional Study

○矢田朋美¹, 青山典生^{1, 2}, 藤井利哉¹, 喜田さゆり¹, 谷口健太郎¹, 岩根泰蔵³, 玉置勝司⁴,
三辺正人^{5, 6}, 小牧基浩¹

(¹ 歯周病学 ² 教育企画部 ³ 神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科イノベーション政策センター ⁴ 顎咬合機能回復 ⁵ 文教通り歯科クリニック ⁶ 環境病理)

〔目的〕味覚は十分な栄養と生活の質を維持するために不可欠であり、味覚感受性の低下は食事を楽しむことに悪影響を及ぼす。日本の急速な超高齢社会において、味覚障害を有する人の数も増加している。味覚障害の有病率が増加しているにも関わらず、味覚感受性と口腔機能との関連は明らかになっていない。本研究は、味覚感受性と口腔機能との関連を評価することを目的とした。〔方法〕2018年から2021年にかけて、神奈川歯科大学附属病院医科歯科連携センターにて参加者を募集した。除外基準は、重篤な全身感染症、妊娠中、および授乳中とした。臨床検査、口腔機能評価、また、水道水、1%甘味、0.3%塩味、0.03%うま味、および0.1%うま味を用いた味覚検査を実施した。口腔機能や全身指標と味覚感受性との関連を統計学的に評価した（有意水準 $p < 0.05$ ）。本研究は、神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認（No. 801）を受けて実施した。〔結果および考察〕この横断研究に参加した169名のうち、39.6%が男性、60.4%が女性であった（年齢中央値：68歳）。多変量解析の結果、味覚感受性の低い参加者は、年齢、性別、喫煙の有無とは無関係に、舌口唇運動機能が低下していた。65歳未満と65歳以上の2つの年齢区分を用いた多重ロジスティック回帰分析により、65歳未満の参加者では、味覚感受性が低下している者において有意に舌口唇運動機能が低下していることが明らかになった。本研究では、味覚感受性と舌口唇運動機能との関連が示唆された。 [学位論文公聴会]

2. ヒト唾液腺癌由来細胞 A253 株におけるトキシシン結合型セツキシマブによる細胞傷害効果の検討

○黒田実可子¹, 小松紀子¹, 高才東¹, 浜窪隆雄², 安部貴大¹

(¹ 口腔外科学, ² 株式会社 PhotoQ3)

〔目的〕我々はこれまで、抗体に毒素を結合した抗体薬物複合体と光線力学療法を併用した頭頸部癌を標的とする抗体医薬の検討を行ってきた。この手法は浜窪らが iTAP 法（intelligent Targeted Antibody Phototherapy）と命名した。我々は頭頸部癌に対し適応のある抗 EGFR 抗体のセツキシマブ（Cmab）にリポソーム不活化蛋白サポリンを付加した IT-Cmab（Cmab immunotoxin）と光増感剤であるタラポルフィン Na（NPe6）を用いて頭頸部癌細胞株における iTAP 法による抗腫瘍効果を明らかにした。今回、近年バイオマーカーに基づく治療法の模索が続いている唾液腺癌に対し、ヒト唾液腺癌細胞株の A253 を使用し iTAP 法での細胞傷害効果を検討した。〔方法〕A253 株、ポジティブコントロールに A431 細胞株、ネガティブコントロールに HSQ-89 細胞株を用い、EGFR 発現解析を RT-qPCR、WB、ICC で行った。これらの細胞に①IT-Cmab による細胞傷害効果の検討②iTAP 法に用いる NPe6 の至適濃度の検討③IT-Cmab と NPe6、近赤外光（670nm, 9.28mW/cm², 22J/cm²）を用いた iTAP 法による細胞傷害効果の検討を行った。〔結果および考察〕EGFR の mRNA 発現量は、A431 ≧ A253 >> HSQ-89 の順で多く、タンパク発現量も同様であった。A253 株では IT-Cmab は Cmab 単独と比較し有意な細胞傷害効果を認めた。一方 iTAP 法では IT-Cmab と比較し有意差を認めなかったため、iTAP 法の適応についても先行研究の結果を踏まえて考察する。 [学位論文公聴会]

3. 頸椎形態に基づく最終下顎骨長の新しい予測法

○山口茉奈美¹, キムヨンイル², 朴熙泰¹, 山口徹太郎¹

(¹ 歯科矯正, ² 釜山国立大学歯学部 歯科矯正学講座)

〔目的〕経年的に撮影された側面頭部エックス線規格写真を用いて、頸椎形態の変化を分析することにより成長期間終了時の最終下顎骨長を推定すること。〔材料と方法〕1965年から1973年にかけて矯正歯科治療を受けていない小学生を対象に6歳から15歳までの女性44人分の370枚の側面セファログラムを対象にセミランドマーク法を用いて頸椎形態を計測した。その後一般化プロクラステス分析と主成分分析を行った。顎顔面骨格と頸椎形態の変化を反復測定データとして線形混合モデルを用いて分析した。本研究は神奈川歯科大学の倫理審査委員会の承認（承認番号：892番）を得ている。〔結果および考察〕第4頸椎形態の変化から成長期間終了時の最終下顎骨長を予測できる式を求めることができた。その結果、セミランドマーク法を用いた最終下顎骨長の予測値と実測値の差は、 $0.17 \pm 0.08\text{mm}$ であった。この予測式のMarginal R²の値が0.96、Conditional R²の値が0.99であり、予測式の精度が非常に良かった。また、下顎骨長の年間増加量は毎年、似たようなペースで増加し、14歳になると年間増加量が減少した。幾何学的形態計測法により第4頸椎形態変化が14歳頃にみられることがわかった。成長期の下顎骨長の年間増加量と頸椎形態の変化量を示す主成分分析から、第4頸椎の成長に伴う形態変化がより明らかであることが示された。また、第4頸椎形態の変化が起こる時期が最終下顎骨長になる時期と一致していたため、最終下顎骨長の予測精度が高かったと考えられる。

〔学位論文公聴会〕

4. 歯科用コーンビームCT画像による顎偏位と上顎洞サイズとの相関

○竹田磨言子¹, 鯨井桂子¹, 高橋正皓¹, 小泉創¹, 畠中玲奈¹, 疋田悠¹, 山口徹太郎¹

(¹ 歯科矯正)

〔目的〕上顎洞は上顎体の中心に位置し、歯の移動やLeFort I型骨切り術など矯正歯科治療と密接に関係する。上顎洞の形態によっては、動的治療中に歯の過度な傾斜、歯根吸収、および副鼻腔穿孔を引き起こすこともある。顎変形症患者に対する矯正歯科治療において顎矯正手術を併用した外科的矯正治療が行われる。LeFort I型骨切り術は、骨切りライン上に上顎洞が含まれるため、上顎洞の形態を詳細に把握することは重要である。本研究はコーンビームCT画像を用いて顎偏位（顔面非対称）の程度と上顎洞の距離計測によるサイズ、体積との相関について明らかにすることを目的とする。〔方法〕神奈川歯科大学附属病院矯正歯科に2020年3月から2023年10月までに来院した18歳から38歳までの日本人154人（男性56人、女性98人、平均年齢24.1歳）を対象とした。コーンビームCT画像を用い、顔面非対称の程度をOr、Co、Go、ANS、B point、Meの計6計測項目において、顔面非対称性指数により評価した。顔面非対称性指数と上顎洞高径、上顎洞幅径、上顎洞長径、上顎洞体積のいずれも計測値の左右差、計4項目との相関について検討した。〔結果および考察〕下顎角部であるGo部の非対称性指数と上顎洞高径の左右差、下顎顎頭部であるCo部の顔面非対称性指数と上顎洞長径の左右差において、有意な正の相関を認めた。下顎角部、下顎顎頭部を基準とする非対称において上顎洞の距離計測値は顎偏位の方向とは逆の非偏位測の値が大きくなることが示唆された。

〔学位論文公聴会〕